

文 学 部

一所懸命と一生懸命

文学部長 向山 宏

NHKの大河ドラマ「毛利元就」が佳境に入ってきている。

その番組の時代考証を担当され



「一所懸命」とは文字どおり、新時代に対処して国人衆たちの階層が抱いていた心性であったようである。戦国時代という難しい時代に自分の所領を保全しようと、日々心を碎いた国人衆たちの願いを護り束ねる形で、毛利元就が台頭していく。そういう状況の中で、元就がどういう人間であり、どういう人間でなければ務まらなかつたのか。

時代と状況が、成功する指導者の内実

人物として描かれるべきなのか。そういう隠れた史実を意識して、ドラマを観ていただきたいものである。

今、文学部でも時代の転換点にさしかかっており、ある意味では教職員が「一所懸命」に頑張つておられる。新入生諸君にとつても、今年から「待たされることになつた。専門教育と教養的教育が、いざれも四年間平行して一貫教

育されることになつたためである。

自分の選択した「一所」を「懸命」に自家薬籠中のものにしていただきたい(専門教育)。欲をいえば、「一所」を基盤にして周辺の新しい学問領域を切り取つて、その上で同時に天下国家や社会のこととも「一生懸命」に考えていただきたい(教養的教育)。

(むかいやま・ひろし)



生活の匙加減

文学研究科博士課程後期

熊谷 卓哉



皆さんご入学おめでとう。突然だが、後の海舟、勝鱗太郎は、はじめ蘭学を学ぼうとした時入門を断られた。その理由は「江戸人は性浮薄で、地味で根気のいる蘭学の習得には向かない」か

らだそうである。出生地で足切りにあつたりはしない現代に生まれて、お互に大いに幸運だ。しかしこの台詞を吐いた蘭学先生にも、「理あるように思える。蘭学に限らず、学問の習得に、地味で根気のいる作業が不可欠なのは事実ではないか。

しかし君たちに関して言えば、蘭学先生の足切りにあう心配はまずないだろう。受験勉強といふ業を、決して短くない期間やり続けることができたという事が、君たちの性情が浮薄でないことを十分に証明してくれている。しかし、この先ということになると保証の限りではない。

大学生活には多くの楽しみがある。多くの楽しみを経験するところが、人間の性情を浮薄にするとは必ずしも言えまいが、多くの楽しみに囲まれてなお、地味な作業を厭わない性情を維持するのが困難であるという経験則は、厳然と存在する。江戸人が浮薄であつたのはなぜか。やはりそれは、爛熟した江戸の文化が彼らに多様な楽し

みを提供していたことと無関係ではあるまい。とはいって、「さまざまな楽しみに背を向けて浮薄を避け、学問の習得を目指すべし」と言うつもりはない。今まで大学を目的として努力してきた人も君たちの中に何人かはいるのだろうが、大学もやはり一つの手段にすぎない。そしてそれは、学問のための手段と決まつたものでもない。大学を何の手段として活用するかは君たちの自由である。大学生活から、なるだけ多くの楽しみを享受して、後々思い出として鑑賞するに耐える華やかな一期期を作つておくのも、実に結構な大学の利用法である。

しかし、全てを求めるのはやはり贅沢というのだ。得られる限りの楽しみを体験しつつ、高い学問を修めることを求められては、大学のほうも当然するだろう。どれだけの楽しみを味わい、どれだけの学問を身につけるか。その匙加減を自分で決めなければならない。「ねばならない」と言つたが、自分の生活の匙加減を全く自分自身で決めることができるというのは、人生においてそうたびたびはない幸運な例外である。結局、君たちが入学と共に得た最大のものは、この匙加減の自由なのだ。君たちがそれを十分注意深く扱うことを行つて、最後にもう一度「ご入学おめでとう」。

(くまがい・たくや)